

## Safety Report

セーフティレポート 子どもと保護者

## 幼稚園児だけでなく、その保護者にも交通安全に対する理解を深めてもらう

3月14日、三重県の四日市市立大矢知幼稚園で交通安全教室が開催され、園児38名と保護者30名が参加した。指導を担当するのは、「とみまつ隊」と呼ばれている同市の交通安全教育指導員（以下、指導員）。「とみまつ隊」は「と（まる）・み（る）・まつ」に由来している。

四日市市では近年、幼稚園や保育園で交通安全教室を開催する際は、園児の保護者にも参加してもらえよう園にはたらきかけている。その理由を同市役所都市整備部道路管理課課長補佐 松田秀八さんは次のように話す。「子どもは身近にいる大人の行動をよく見ているので、保護者の方には子どもの手本になっていただきたいと思っています。指導員が交通ルールや安全行動を教えても、保護者の方が実践していなければ身につけません。幼稚園・保育園で保護者の方に参加していただけるケースは少ないので今後、増やしていきたいと考えています」。

保護者向けの講話に  
Hondaのプログラムを活用

交通安全教室では、最初に指導員が腹話術人形を使って、園児と保護者に交通安全3つの約束「とまる・みる・まつ」について説明。「道路を渡る前に自分の足をピタッととめます。みる時は首をしっかり動かして右、左、右をみてください。クルマがみえたら、通り過ぎるのを待ちましょう」。

ここから保護者だけ別室に移動し、保護者向けの講話が始まる。この講話の中で、同市はHondaが開発した幼児の保護者向けプログラム「わが子の命を守るために」を取り入れ、今回は「歩き方」をテーマにした本編映像を活用した。この映像では、安全意識の高いお母さんは子どもと常に手をつなぎ、信号が青でも曲がってくるクルマがあるので渡る前に

右、左、右をみることを教える。しかし、もう一人のお母さんは携帯電話での会話に気がとられ、子どもを一人で歩かせてしまう。さらに信号が青点滅になった時、先に渡ってしまい、横断をやめようとする子どもを「早く行くよ」と呼びかける。すると、お母さんに向かって走る子どもが右折してきたクルマと衝突してしまう。ここで映像を止め、指導員は「最後は子どもがたいへんな事故に遭ってしまったわけですが、これを防ぐには、どうすれば良かったのでしょうか？」と問いかけ、保護者に考えてもらう。そして、「お父さんと歩く時はスマートフォンなどの使用は控え、道路に飛び出さないように必ず手をつないでください。手をつなぐ時は手が離れにくくなるように、お父さんの手首をつかむようにしましょう。信号が青点滅になっても急がず、次の青になるまで、まつという手本を示すことが大切です」とアドバイスした。

続いて、プログラムの資料集に収録されている子どもの飛び出し事故の事例を紹介。なぜ事故が起こってしまったのかを保護者に考えてもらう。「とまる・みる・まつを実践していれば、この事故は防げました。また、道路横断中の事故は自分の左側から来たクルマと衝突するケースが多いので、渡っている時も周囲をよくみるように教えてあげてください」。

このほか、保護者にはチャイルドビジョンで子どもの視界を体験してもらうことで、大人より狭いことを伝えた。

「とまる・みる・まつ」を  
園児に実践してもらうために

保護者向けの講話の時、園児には指導員が信号機の色の意味を説明。この後、園庭につくられた模擬の交差点で道路の渡り方の練習となる。交通安全3つの約束「とまる・みる・



保護者向けの講話では「歩き方」をテーマにした本編映像が使われた



資料集を使って、飛び出し事故を防ぐためのポイントを解説



チャイルドビジョンで子どもの視界を体験する保護者

まつ」を実践してもらうためだ。保護者はその様子を見守った。

信号が赤から青に変わっても、すぐに渡らず、右左折して近づいてくるクルマがないか確認することを園児に身につけてもらう。指導員はクルマ役になり、交差点を往来。園児には、この指導員の動きをよくみて、とまるか渡るかを判断するように指導した。また、「(実際の交通場面では)できるだけクルマの運転手さんの目をみてください。目が合わない時は、渡ろうとする皆さんのことに運転手さんが気づいていないかもしれません。クルマがとまってくれたら、運転手さんの目をみて、『ありがとう!』といきましょう」と補足。指導員の岩田康子さんは「『よくみてね』と伝えても、何をみたらいいのかわからない子どももいます。そこでクルマのドライバーの目をみるように指導しています。こうしたアイコンタクトを身につけておくことは子どもたちが将来、クルマを運転する立場になった時も役立つと思います」と話す。

「皆さんは間もなく、小学校に入学します。家から小学校へ行く道、帰る道は決められていて、一人ひとり違います。入学式までに、おうちの人とその道を歩く練習をしてください」と指導員が園児に呼びかけ、交通安全教室は終了した。

視覚に訴えることにより  
保護者の関心が高まる

大矢知幼稚園園長 佐久間節子さんは「交通安全教室を実施する時は、保護者の方にも参加してもらおうようにしています。一緒に歩く時、お父さんにより具体的にアドバイスできるようになるからです。今回、保護者向けにつくられたプログラムを使ってもらったのは良かったと思います。映像で視覚に訴えることにより、皆さんの関心も高まったと感じました」と感想を語った。

保護者向けの講話を担当した指導員の羽木晶代さんは「Hondaのプログラムは映像によって悪い行動例を示すことで、保護者の方に思い当たる部分がないか振り返ってもらえることができます。これが安全意識を高めるのに効果的だと思います」と手ごたえを感じている。交通安全教室に参加した保護者の声（下記参照）からも、様々なことに気づいていただけたといえるだろう。

四日市市は毎年8月に3日間、市の総合会館で小学生以下の子どもとその保護者を対象に「交通安全親子教室」を開催している。こうしたイベントにも、Hondaのプログラムを取り入れ、保護者の交通安全に対する理解を深めてもらう考えだ。

## 交通安全教室に参加した保護者の声

- ・スマートフォンの操作などに気がとられて、子どもから目を離してしまう瞬間は確かにあります。映像を見て、そうした状況が危険であることを再認識したので、今後は気をつけようと思います。
- ・青信号が点滅している時は、自分が焦って渡ってしまうことがないように注意したいと思います。また、赤信号では車道の近くで信号まちをしないように子どもに伝えたいと思います。
- ・チャイルドビジョンを体験して、子どもの視野は思った以上に狭いことが理解できました。子どもも自分と同じように見えているという前提で教えていたので、それを改めようと思います。
- ・小学校入学までに通学路と一緒に歩いてみようと思います。信号機がある場所でも、子ども自身が安全であることを確かめて、本人の意思で渡っていいか判断できるようにしていきたいです。

## 幼児の保護者向けプログラム「わが子の命を守るために」

このプログラムは幼児の保護者に対して、危険な交通場面の映像と資料から自分の行動を振り返り、わが子の命を守るために何をすべきかに気づいていただくことを目的としている。プログラムは「歩き方」「自転車」「自動車」など5つのテーマからなる本編映像および資料集で構成。本編映像は2人の保護者（お母さん）の交通安全に対する意識や行動を比較することで、子どもを事故から守るためにはどのように行動すべきかを考えていただく内容となっている。映像を流すだけでなく、指導者が保護者と対話できる構成になっている点が大きな特徴である。



指導員が腹話術人形とのユーモラスなかけ合いで「とまる・みる・まつ」の重要性を伝えた



学んだことを実践できるように道路の渡り方を練習



四日市市立大矢知幼稚園園長 佐久間節子さん



信号機の色の意味をオリジナルの教材を使って説明



ドライバーの目をみることを園児に意識してもらう



写真左から、四日市市役所都市整備部道路管理課課長補佐 松田秀八さん、交通安全教育指導員 岩田康子さん、曾根栄子さん、羽木晶代さん、同課 吉本純音さん、瀧本俊明さん